

大淵の

帳ヶ塚

平成七年八月五日号

大淵の落合町にある小高い丘に「帳ヶ塚」の碑と供養塔が建っています。

これは、自分の身の危険も顧みず、年貢を軽くしてくれと、代官所に願い出て、死罪となった落合の名主、新右衛門を供養したものです。

今回は、帳ヶ塚の近くにお住まいの勝亦吉信のぶさんから、お話を伺いました。

江戸時代は年貢が厳しく、飢饉ききんがあると、農民は食べるものがなくなり、多くの人が飢

えて亡くなりました。

今から約二百年前のこと、落合の名主、新右衛門は、日ごろから村の作高と年貢の関係を詳しく帳面につけ、年貢がしつかり納められるよう調べていました。ところが、大きな飢饉が、この地方を襲いました。後に言う天明てんめいの大飢饉です。

新右衛門は、領主に「年貢を軽くしてほしい」と再三願い出しましたが、「年貢米は、決められたとおりに納めろ」と聞き入れてもらえませんでした。そのため、新右衛門は仕方なく、落合、

中野、片倉、三ツ倉の四か村の代表として、訴状を持つ



て江戸に旅立ったのです。

しかし、何日経っても、新右衛門からの連絡はありません。そして一か月後、新右衛門の死が伝えられました。新右衛門は、直訴じきその罪で、よく調べられることなく、打ち首になっ



▶ 新右衛門の供養塔「帳ヶ塚」

たのです。

ただし、新右衛門の死はむだにはなりませんでした。新右衛門が持参した書類を後から役人が読んで、年貢が軽くなったのです。

村の人たちは、村の小高い丘の上に、訴状の下書きや血判状の控え、新右衛門の日記などを埋めて供養塔を建て、「帳ヶ塚」と呼んで後世まで供養したのでした。

勝亦吉信さん（落合町）

昭和五十四年に「帳ヶ塚」を整備する目的で、供養塔の下を掘り返してみました。訴状の下書きや血判状の控えなどは、出てきませんでした。何しろ二百年も前のことだから、紙が土にかえってしまったのではないのでしょうか。今では、毎年四月の第一日曜日に、お経を上げて供養しています。四、五年前まではお祭りにもぎやかだったんですが…。